

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 13 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720251

研究課題名(和文) 異文化環境で教えるネイティブ語学教師の職業倫理に関する調査研究

研究課題名(英文) The research about professional ethics of native teachers of languages who teach in different cultural environments

研究代表者

Antier Emmanuel (ANTIER, Emmanuel)

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：40550190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な目的は、ネイティブ語学教師が異文化環境で教える際にその職業倫理がどのように機能しているかということ記述し、モデル化することである。異文化環境で教える語学教師の職業倫理にはどのような特徴があるのか、どのような価値観や規範、原則に基づいて教師は自分たちの教育活動に方向性を与えているのだろうか、彼らの職業倫理とはどのようなものなのか。これらの疑問に対する答えを得るために、フランス語ネイティブ教師及び日本語ネイティブ教師を対象に日本とフランスでインタビュー調査を行い、その結果を分析した。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research is to describe and create a model of how professional ethics function when native teachers of languages are teaching in different cultural environments. What are the features of the professional ethics of native teachers of languages, what kind of values, standards and principles do they apply to the directionality of their teaching activities, and what kind of professional ethics do they have? In order to get responses to these questions, I conducted an interview survey targeting French native teachers and Japanese native teachers in Japan and France.

研究分野：フランス語教育

キーワード：フランス語教育 異文化接触 ネイティブ語学教師 職業倫理

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景

異文化環境における言語文化教師の問題に関する考察は、今日異文化アプローチが主流である。1980年代から1990年代にかけて語学教育に導入された異文化アプローチは、異なる文化が交流する際の衝突を避けることを目的としているため、異なる文化を持つ2人の一時的な出会いの場における行動に対する指針が有効的に示されても、ある期間行動を共にし、衝突の可能性も孕んだ教育上のより深い教師と学生の関係について考察するには十分ではない。また、教師教育の観点から言えば、異文化アプローチというのは、処方論的すなわち、異文化交流の際に取り入れるべき価値観や行動の規範について述べたものである。しかし、教育学の分野では、どのような行動をとるべきかという規範を教師に与えることよりも、教師が自分たちの態度を正当化する能力を伸ばすことの重要性が指摘されている(Desaulniers 2006)。本研究でも、この、教師が自分たちの態度を正当化する能力を伸ばせるようになることを最終的な目的とし、語学教育の分野に属する研究ではあるが、教育学における職業倫理を概念的な拠り所としていく。

「教師は何をすべきか」「何をすべきだったのか」「どこまで対応してよいのか」といった教育現場におけるこうした平凡ではあるが決定的な疑問に対する答えを見つけようと、教師は様々な価値観や原則や基準を参考にするのであるが、価値観等は各人が属する文化(家族・社会・宗教)によって異なるものであるし、時代によっても異なるものである。宗教的権威や政治的権威が弱体化し、個人主義と価値観の多様化が進む現在、倫理の問題は重大性を増してきている。特にアメリカ合衆国やカナダ・ケベック州においては、教師の職業倫理に関する研究は、現在、教育学における重要な研究分野となっている。教育学では大きく発展中の研究分野になっている教師の職業倫理であるが、語学教育にはあまり活用されていない。倫理面の研究や考察が幾つかおこなわれたものの、思想的で、教師の倫理的課題を明らかにするというよりも、服務義務に関する考察を促そうとするものが殆どである。本研究は、語学教育における教師の職業倫理について考察するものである。教師の職業倫理に関する研究は、規範的研究と記述的研究に大別できる。前者は、主に教育の目的についての考察が行われ、後者は、実際に教師が感じている倫理的課題の概念化を目指している。教育学の分野では、規範的研究に基づいた論文は多く発表されているが、記述的研究で教師の職業倫理について研究したものは非常に少ない。

(2) 研究の独自性

本研究の独自性は、以下の3点である。

1. 語学教師の職業倫理に関する研究である

こと、2. 記述的分析によるものであること、3. 異文化環境で教える教師の職業倫理に関する研究であること。上述のように、語学教育における職業倫理に関する研究はほとんどない。しかし、Blanchet(1998)の指摘にもあるように、語学の習得はアイデンティティ確立のメカニズムと関係があるため、語学教育は倫理的な視点から考える必要がある。また、教師の職業倫理の記述を目的とした語学教育研究は管見の限り見当たらない。最後に、教育学の分野において、教師の職業倫理をテーマにした研究は幾つか行われているが、異文化環境という特殊な教育の問題については取り上げられていない。しかしながら、「教師の職業倫理」を「応用倫理」すなわち「実際の状況における物事の決定に焦点が絞られた倫理」と考えれば、教師が教えている異文化環境は、その倫理の特殊性を作り上げる決定的要素となると思われる。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、語学教師が異文化環境で教える際にその職業倫理がどのように機能しているかということ記述し、モデル化することである。異文化環境で教える語学教師の職業倫理にはどのような特徴があるのか、どのような価値観や規範、原則に基づいて教師は自分たちの教育活動に方向性を与えているのだろうか、彼らの職業倫理とはどのようなものなのか。これらの疑問に対する答えを得るために、フランス語ネイティブ教師及び日本語ネイティブ教師を対象に日本とフランスでおこなうインタビュー調査の結果を分析する。

最終的には、異文化環境で言語文化教師が直面している課題を明確化し、教育活動の方向付けを助けるツールを提案し、教師教育に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究の枠組み

本研究は、異文化環境で教える語学教師の問題に関する一連の研究(Antier 2009, Antier 2010a, 2010b, Antier 2011a, 2011b)の内容を発展させたものである。Antier(2009)において、日本の大学で教えるフランス語ネイティブ教師に対しておこなった調査の結果を分析した結果、彼らの教育活動において多く実践されている5つの倫理の柱が特定できた。その柱とは、「真実性」「他者性」「妥協」「信頼」「知識」の5つである。Morin(2005)の「反復の原理」に基づき、倫理に関する考察や実践結果の分析を容易にするため、図1のようなモデルを提案した。本研究は、インタビュー調査を行い、そのデータを質的に分析することで、このモデルの妥当性を検証し、必要があれば、改善、修正を加えることを目指す。

研究期間内に行った内容は、次の5つのステップに分けることができる。(1) 本研究の

図1 異文化環境で教える教師の倫理



目的及び仮説に基づいた「インタビュー調査質問表」の作成、(2)日本及びフランスにおけるインタビュー調査の実施、(3)インタビュー調査の録音記録の文字化、(4)語学教育現場において多く実践されている倫理基準の特定及び記述のためのデータ分析、(5)異文化環境で教える語学教師の職業倫理のモデル化、である。

(2) 調査方法

インタビュー調査は、日本とフランスで行った。インタビュー調査対象者の内訳は、表1に示す通りである。

表1 インタビュー調査対象者の内訳

調査協力者の区分	予定人数	
	日本	フランス
外国語としてのフランス語を教えるフランス人教師	6	6
外国語としての日本語を教える日本人教師	0	6

Antier (2009) では、日本で教えているフランス語ネイティブ教師を対象に調査を行い、そのデータから、語学教師の倫理基準を幾つか特定することができたが、機能について記述するにはデータが十分ではなかった。本研究では、量的及び質的に調査方法を充実させるため、日本で教えるフランス語ネイティブ教師だけでなく、フランスで教えるフランス語ネイティブ教師、フランスで教える日本語ネイティブ教師を対象に新たにインタビュー調査を行う。調査対象者に、日本 vs フランス、他文化で教えること vs 自文化で教えること、フランス人教師 vs 日本人教師といった観点を加えることで、より普遍的なモデルの提案を目指した。そして、異文化環境で教える語学教師に共通する職業倫理が存在するという仮説を立てた。

(3) 分析方法

インタビュー調査録音データの分析には、Glaser & Strauss(1967)において考案され、Paillé (1994) が進化させた分析方法、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いる

予定であった。しかし、インタビュー調査を分析後得られた仮説を検証するために新たな質問項目を加えるという、調査と分析を並行して進める研究手法は、海外で一度にデータを収集する本研究には適していなかった。そのため、すべてのデータを同一のテーマでまとめて分析するという手法に変更した。分析には、インタビューデータから抽出した要素を、職業倫理という観点からカテゴリー化し、分類するという手法をとった。

その結果、「真実性」「他者性」「妥協」「信頼」「知識」という5つの柱からなる、異文化環境で教える言語文化教師の職業倫理モデルは、概ね妥当であることが分かった。しかし、さらなる検証や細分化は今後の課題とする。

4. 研究成果

本研究では、フランスと日本において、異文化環境で教えるネイティブ言語文化教師に対して、インタビュー調査を行い、職業倫理の観点から、「真実性」「他者性」「妥協」「信頼」「知識」の5つの柱に基づく職業倫理モデルを枠組みとして、インタビューデータの分析を行った。その結果、修正やさらなる細分化の必要性はあるものの、本モデルの妥当性は検証できた。

また、本インタビュー調査の結果分析を通して、興味深い示唆が得られた。それは、教師による学習者母語の利用の有用性と学習者の教育文化を知ることの重要性である。

教師による学習者母語(日本の場合は日本語)の使用という選択は、学習者に安心感を与えるという倫理的な必要性和、二つの言語文化が接触する際の摩擦を避けるという必要性に応えるための手段として用いられる。その一方で、ネイティブ教師として目標言語を使うべきであるという教師側の教授法観と、さらに、目標言語を話す者であるという一般的に求められる教師像からは矛盾するものである。このようなディアレクティックな関係にあるものとして、学習者母語の使用は位置づけられるということが、インタビュー結果から実証的に明らかになった。学習者の母語使用に関する研究は、従来、様々な先行研究が行われてきたが、職業倫理の観点からの指摘ができたことは、本研究の意義である。

また、学習者の教育文化を知るとは、学習者の学習態度の解釈を可能し、教師が学習者の教育文化に適応できるということにつながるという点で、有効である。これは、職業倫理モデルの枠組みでは、「他者性」と「知識」の指針に関わるものである。近年の異文化間教育研究の主流となっているのは、学習者の文化的背景を知ることよりも、個人の特性と出会うことが重要であるという考え方である。その考え方によると、学習者の文化的背景知識を知ることによって、教師がステレオタイプの固定観念を作ってしまう、個

人の特性を知る際の障害になるというものである。しかし、本研究のインタビュー調査結果で明らかになったことは、学習者の教育文化的背景を知ることが、学習者個人の学習態度を理解するうえで助けとなるということである。このことは、教師研修において取り入れるべき項目であると思われる。このことは、日本とフランスのような、教育文化的な差異の距離の大きい文化同士の場合に特にいえることである。

今後、異文化環境で教える言語文化教師が倫理について考える必要があるということがもっと認知されなければならないであろう。実際に、職業倫理に関する教師研修の要望も出てくるとと思われる。本研究の成果は、異文化環境で教える教師の指標を作るための基礎的な資料を提供できたのではないかと思われる。

【引用文献】

- ANTIER, E. (2009) Conflits interdidactiques et problématique de l'éthique : le cas des enseignants natifs de français langue étrangère en université japonaise. Mémoire de Master 2 inédit, Université Jean Monnet de Saint-Étienne.
- ANTIER, E. (2010) Contextualisation et problématique de l'éthique : penser la centration sur l'enseignant. *Revue japonaise de didactique du français*, vol.5(1), 127-145.
- ANTIER, E. (2010) Du culturel et de l'individuel dans la rencontre interdidactique : éléments de réflexion sur l'éthique des enseignants en contexte interculturel. *Rencontres*, vol.24, 15-20.
- ANTIER, E. (2011) Formation à l'éthique professionnelle des enseignants de langue-culture: constats et perspectives. *Les Cahiers de l'APLIUT*, vol.30(3).
- ANTIER, E. (2011) Éthique professionnelle des enseignants de langue-culture et limites de l'approche interculturelle. *Rencontres*, vol. 25, 45-49.
- BLANCHET, P. (1998) *Introduction à la complexité de l'enseignement du Français Langue Étrangère*. Louvain : Peeters.
- DESAULNIERS, M.P. (2006) Éthique professionnelle et enseignement collégial. In *Enseigner au collégial, une profession à partager*. Montréal : Association québécoise de pédagogie collégiale.
- MORIN, E. (2005) *Introduction à la pensée complexe*, Paris, Le Seuil.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

ANTIER, E. La problématique éthique du « savoir-être » en didactique des

langue-culture : quelques réflexions autour du CARAP et autres productions du Conseil de l'Europe, *Travaux de didactique du français langue étrangère*, N° 71, 査読有, 2015 (掲載決定済)

ANTIER, E. La dimension éthique du recours au japonais dans la pratique des enseignants natifs de FLE en universités japonaises : entre nécessité et résistance, *Revue japonaise de didactique du français*, Vol. 10, N°1, 査読有, 2015 (掲載決定済)

ANTIER, E. Primat de l'altérité et culpabilisation des enseignants de langue-culture : une étude exploratoire. *Dialogues et cultures, revue de la FIPF*, N° 61, 査読有, 2015, 117-129.

ANTIER, E. Pour une réflexion disciplinaire sur l'éthique professionnelle des enseignants de langue-culture. *Recherche et pratiques pédagogiques en langues de spécialité*, Vol. 32, N°2, 査読有, 2013, 11-26.

〔学会発表〕(計2件)

ANTIER, E. La problématique éthique du savoir-être en didactique des langues-cultures 日本フランス語教育学会春季大会, 2014年5月, お茶の水女子大学

ANTIER, E. Pour une réflexion disciplinaire sur l'éthique professionnelle des enseignants de langue-culture, 日本フランス語教育学会秋季大会, 2012年11月, 熊本大学

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

アンティエ エマヌエル (ANTIER Emmanuel)

金沢大学外国語教育研究センター・准教授
研究者番号 : 40550190